

小木原地下式横穴墓群Ⅱ 古代官道跡



2023

宮崎県えびの市教育委員会

小木原地下式横穴墓群Ⅱ 古代官道跡

2023

宮崎県えびの市教育委員会

序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたることから、古くから交通や物流の要所として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特の地域であります。

北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。

平成20年代後半から、市内各所で市道拡幅工事が急増し、周知の遺跡と重複する所については、試掘調査や工事立会を実施しております。その中で、遺構が顕著であった小木原地下式横穴墓群と、古代の官道跡と推定される溝状遺構が検出された市道真崎地点の調査成果を報告します。小字真崎は、古代官道の駅家名「真斫」を想定させる重要な地名で、ここに始めて学術的メスが入りました。今後の官道・駅家の解明に向けての第一歩となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力いただいた県文化財課諸氏、県埋蔵文化財センター諸氏、調査に対してご理解・ご協力いただいた西諸県農林振興局ならびに地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事していただいた作業員の方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

えびの市教育委員会

教育長 永山新一

例 言

1. 本書は、市道栗下上江線および市道真崎線拡幅工事に伴う発掘調査の報告書である。前者は、平成29年度と30年度、後者は平成29年度に本調査している。前者における小木原地下式横穴墓群分布域での工事が数年続く計画であり、完了後に本報告を刊行する方針を立てたので、成果の公開が遅れた。
2. 調査は、えびの市教育委員会が実施した。前者は結果的には、遺構を検出した平成30年2月7日～27日（Ⅰ区）と平成30年8月28日～9月19日と10月10日（Ⅱ区）が対象である。後者は、周知の遺跡外であるが、古代官道および駅家「真研」駅付近と推定される重要地点であることから、拡幅部分と現道部分を全面調査し、関連する遺構・遺物の発見に注視し、平成29年11月6～7日、12月26日、平成30年2月2日を充てた。
3. 遺構および出土遺物の写真撮影は中野が担当した。
4. 小木原地下式横穴墓群の三次元画像は、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也教授が作成された成果および玉稿を賜り、掲載させていただいた。記して感謝申し上げます。
5. 出土人骨の実測～取上～分析については、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に委託し、玉稿を賜り、掲載している。記して感謝申し上げます。
6. 本書の執筆編集は、中野が担当した。

凡 例

1. 地下式横穴墓はST、竪穴建物はSA、土坑はSK、柱穴はPPとして略している。
2. 小木原地下式横穴墓群の遺構番号は、昭和62年度調査の蕨A地区が1000番台、蕨B地区が2000番台、昭和63年度調査の蕨C地区が3000番台。久見迫B地区が4000番台として報告されているので、市道拡幅関係を5000番台とした。
3. 遺構に自然に埋まった土を覆土、人為的に埋められた土を埋土と呼称する。
4. 写真図版中のピンボールの長さは、全て1.0mである。

調 査 組 織

調査主体	えびの市教育委員会	教育長	萩原和範（令和元年7月まで）
			永山新一（令和元年8月から）
		社会教育課長	領家修司（令和2年度まで）

	齋藤和明	(令和3年度から)
補佐兼文化係長	山下誠介	(令和元年度まで)
	齋藤和明	(令和2年度)
	高佐伸也	(令和3年度から)
主任主査	小島英子	(令和3年度まで)
	中野和浩	(令和元年度まで)
主任技師	中野和浩	(令和2年度から)
技師	税田脩介	(令和2年度から、事務)

発掘調査作業員

平成29・30年度 上牟田忠正

整理作業員

令和4年度 徳澄みどり、濱田彩子

本文目次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章	小木原地下式横穴墓群	5
第4章	古代官道跡	19
第5章	小木原5001号地下式横穴墓出土人骨	25
第6章	小木原5001～5005号地下式横穴墓の三次元計測	27

挿図目次

第3章

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡位置図	1	第7図	ST-5001 遺構実測図	9・10
第2図	小木原地下式横穴墓群の分布および調査区位置図	3・4	第8図	ST-5002 遺構実測図	11
第3図	I区遺構分布図	6	第9図	ST-5003 遺構実測図	12
第4図	SA-01 遺構実測図	6	第10図	ST-5004 遺構実測図	14
第5図	SA-01 出土遺物実測図	7	第11図	ST-5005 遺構実測図	15
第6図	SD-01, SK-10 遺構実測図	7	第12図	ST-5001～5005 出土遺物実測図	16
			第13図	蔵B地区ST-2003 遺構実測図	17

第4章

第1図	市道真崎線拡幅工事地点および周辺地形図・字界	20	第3図	官道跡出土遺物実測図	21
第2図	官道跡遺構実測図	21	第4図	官道復元図	22

表目次

第3章

表1	SA-01 出土 弥生土器 観察表	7
表2	地下式横穴墓出土 鉄器 観察表	17

第4章

表1	官道跡出土 弥生土器 観察表	21
----	----------------	----

写真図版目次

表紙 ST-5005 竪坑壁面の掘削痕 (実大)

小木原地下式横穴墓群

図版1 I区 全景 (西から)、(東から)

図版2 SA-01 貼床面検出 (南西から)、内区 焼土・土器片 出土状態 (南から)、内区～西側 貼床除去、全景 (南東から)

- 図版 3 ST-5001 塹坑検出状態（南から）、埋土除去 塹坑上部閉塞状態（南から）、（北から）、完掘全景（南から）
- 図版 4 ST-5001 玄室内、西壁、東壁 下端中央に頭骨
- 図版 5 ST-5001 人骨左上腕貝鋼と頭骨、左上腕と貝鋼、頭骨、大腿骨～寛骨
- 図版 6 ST-5002 検出、塹坑内崩落閉塞石検出、塹坑出土 閉塞石、板石崩落状態、塹坑 完掘 壁に赤色顔料（南から）、東壁の赤色顔料（西から）、西壁の赤色顔料（東から）
- 図版 7 ST-5002 玄室、西側の鉄織群と拳大の礎
- 図版 8 ST-5002 玄室中位の天井の赤色顔料塗布状態、西壁上の天井の赤色顔料、東壁上の天井の赤色顔料塗布状態、塹坑東面の赤色顔料塗布状態
- 図版 9 ST-5003 塹坑検出状態（南から）、半截、断面（東から）追葬坑なし、塹坑上部閉塞状態（北から）、完掘（東から）
- 図版 10 ST-5003 玄室 西～中位、中位～東、東壁～天井の掘削痕、西壁～北壁天井の掘削痕
- 図版 11 ST-5004 検出状態（南から）、塹坑半截（西から）、塹坑上部閉塞状態、完掘、閉塞材
- 図版 12 ST-5004 玄室 左下に下肢骨、右奥に鉄織 2 を縦に配置、南側の鉄織（左上）手前の赤色顔料と頭骨痕
- 図版 13 ST-5005 塹坑検出状態（南から）、（西から）、閉塞板石除去、拳大の詰石（南から）、塹坑内 崩落板石 下方に白色粘土層、塹坑上部閉塞板石、玄室棟西端上の小 pit
- 図版 14 ST-5005 玄室内、西側～中央付近
- 図版 15 ST-5005 寄棟西角～西面 角に穿孔・詰塞石、接写（黒泥土を除去しきれっていない）、（真下から）、左裾部 上位の壁面
- 図版 16 ST-5005 玄室 北東角～天井、北西角～天井、棟 東端部、塹坑内 上部の手斧もしくはタビによる掘削痕
- 図版 17 SA-01 出土遺物、ST-5001 出土遺物（1）、（2）、ST-5002 出土遺物
- 図版 18 ST-5004 出土遺物、ST-5005 出土遺物

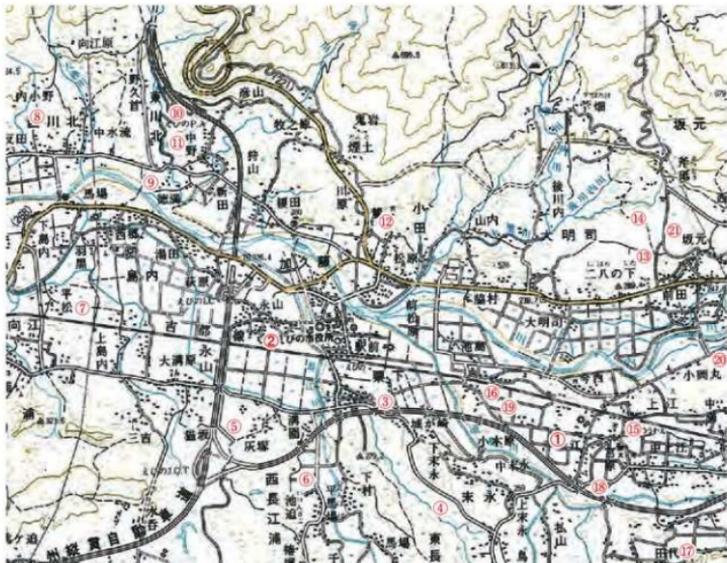
古代官道跡

- 図版 1 市道真崎線拉幅西端部（Ⅰ区）（西から）、Ⅰ区東端から西を望む、Ⅱ～Ⅲ区（西から）、Ⅰ区 官道跡清掃（西から）
- 図版 2 Ⅰ区 官道跡 全景（北西から）
- 図版 3 Ⅰ区 現道下 確認調査、Ⅰ区 東部現道下 確認調査、Ⅱ区 現道下 確認調査、Ⅲ区 現道下①確認調査 近現代の櫛列
- 図版 4 官道底面出土土器 左端 2 段目のみ古代か、Ⅰ区東半部 Ⅲ層出土土器、Ⅲ区 Ⅲ層出土土器

第1章 はじめに

平成27年度あたりから、市内各所で市道拡幅工事が盛んになり、各路線年間100mほどの工事を複数年計画で実施している。周知の遺跡内においては、試掘調査もしくは工事立会で対応している。そうした中で、市道栗下ー上江線の西上江地区では地下式横穴墓や堅穴建物を検出し、市道真崎線の灰塚ー永山地区では古代官道跡が検出されたので、この2件について報告する。

前者は、令和3年度まで実施し、地下式横穴墓も毎年1～3基を想定していたが、結果的には、平成29・30年度調査対象地検出の5基のみと堅穴建物1棟であった。後者は周知の遺跡外・沓蓋原に立地するが、小字真崎が古代の駅家に関わる重要な位置にあり、調査できる機会を待ちわびていた。昭和63年以降の市内東部の上江地区の圃場整備事業に伴う調査においては、「官道」の意識欠落により未確認であるので悔いを残すが、中西部において極力痕跡を探る糸口を探している。



- 1: 小木原地下式横穴墓群
- 2: 大字灰塚字真崎
- 3: 草刈田遺跡
- 4: 柵野第1遺跡
- 5: 灰塚地下式横穴墓群
- 6: 役所田遺跡
- 7: 島内地下式横穴墓群
- 8: 内小野遺跡
- 9: 徳満城跡
- 10: 妙見遺跡
- 11: 東川北地区遺跡群
- 12: 加久藤城跡
- 13: 芋畑地下式横穴墓群
- 14: 二本杉遺跡
- 15: 法光寺跡
- 16: 木崎原古戦場跡
- 17: 上田代遺跡
- 18: 桑田遺跡
- 19: 永田原遺跡
- 20: 北田遺跡ー田之上城跡
- 21: 稲荷下遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図 (1:50,000)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

えびの市は、34 万年前の加久藤カルデラの中にあり、10 万年前の阿多カルデラの火砕流とその後の堆積物の上に、3 万年前の入戸火砕流（シラス）が標高 400 m 位まで被る。その後、2 万年前までの霧島山系の火山活動で狭長な盆地になり、やがて湖になり、西南方が決壊して水が排出されつつ、高位段丘～中位段丘～低位段丘（16700 年前の小林ボラを含む）が形成される。氾濫原を西流する川内川は暴れ川で、昭和 40 年代に堤防が出来るまでは流路を変えていた。従って周知の遺跡の殆どは段丘面であり、現在、地目が畑地となっている所の殆どは周知の遺跡である。

小木原地下式横穴墓群は、幅 6 km の扇状地（原田・上江遺跡群）の西端部、えびの市大字上江宇小木原・巖・久見迫・地主原・馬頭・長谷川・宮原・鳥越に至る、東西約 1.3 km・南北約 0.5 km の範囲に分布し、比高 10 m の低位段丘に立地する。

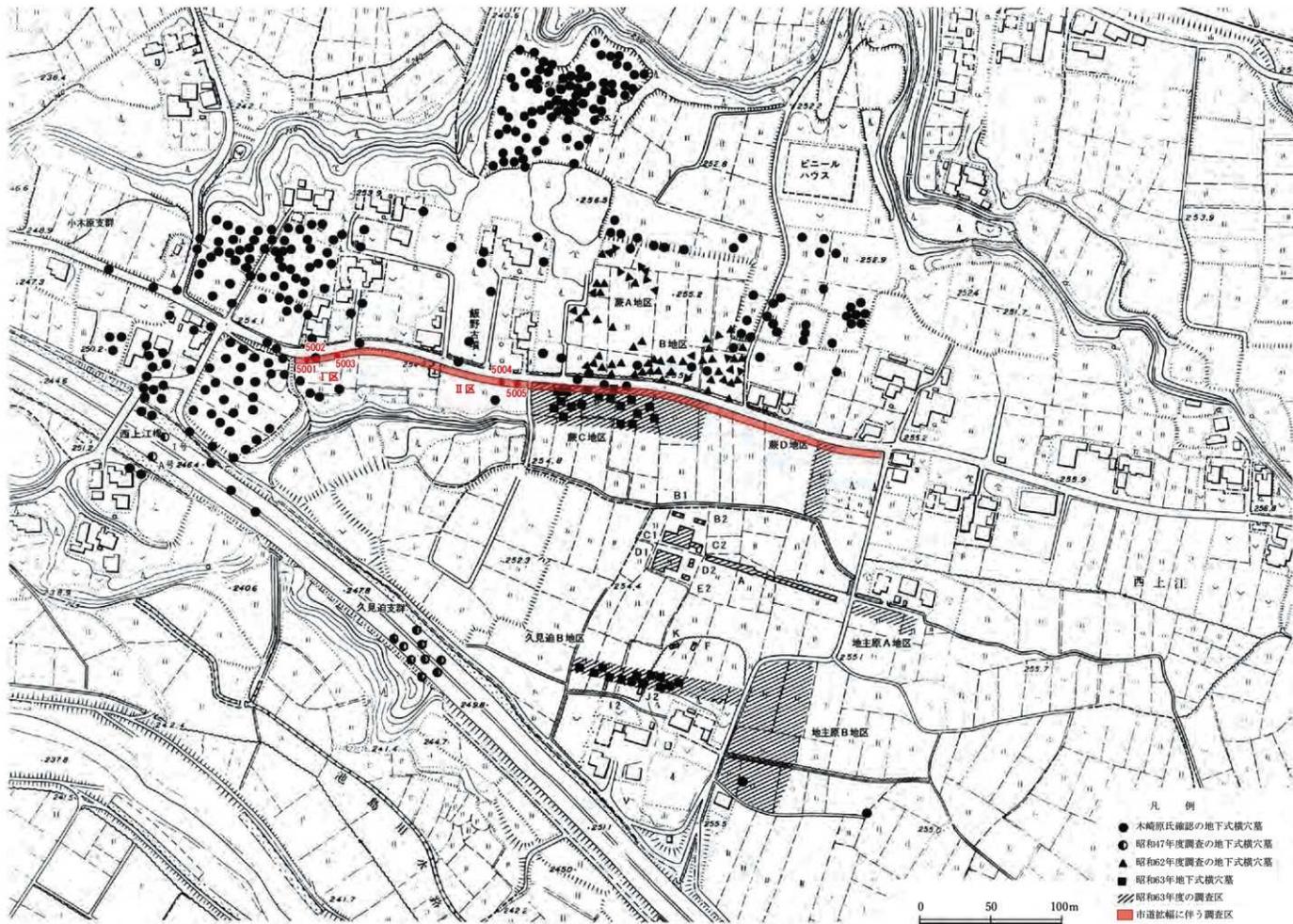
大字灰塚字真崎地点は、えびの市大字灰塚と永山の境界部の市道に位置し、周知の遺跡外である。盆地中央を西流する川内川は暴れ川で、その支流の池島川と長江川も暴れ川であった。古代以降、相当量の土砂を運び、流路を変えつつ、広大な氾濫原に堆積していることから、周知の遺跡は埋没あるいは消滅していると想定される。

周囲に旧石器が出土した遺跡は、東川北地区⁽¹⁾のみである。縄文時代早期は妙見遺跡⁽²⁾と二本杉遺跡⁽³⁾で、中期後半～後期は役所田遺跡⁽⁴⁾や上田遺跡⁽⁵⁾で、後期～晩期は役所田遺跡で相当量の遺物が出土している。縄文時代の堅穴建物は今現在まで未発見であるが、園田城跡で後期初頭頃の柱穴が直径 6 m 前後に並ぶものが 6 基確認できている⁽⁶⁾。弥生時代早期の突帯文土器は点々と出土しているが、桑田遺跡⁽⁷⁾で石鍬と共にまとまって出土し、プラントオパールも検出されている。後期～古墳時代の集落は多く、草刈田遺跡⁽⁸⁾、終野第 1 遺跡⁽⁹⁾、内小野遺跡⁽¹⁰⁾、二本杉遺跡で間仕切り住居が検出されている。古墳時代の地下式横穴墓群は、島内⁽¹¹⁾、灰塚⁽¹²⁾、芋畑⁽¹³⁾、小木原⁽¹⁴⁾、建山など凡そ 2.5 km おきに分布し、島内は出土品 1029 点が国重要文化財に指定され（1～130 号墓出土品対象、現在 178 号墓まで調査）、小木原は 4 支群+α で 400 基以上の存在が知られる著名な墳墓群である。

古代には官道が敷かれ、草刈田遺跡で官道跡が検出され、永田原遺跡⁽¹⁵⁾や北田遺跡一田之上城跡⁽¹⁶⁾などにおける区画溝と段丘崖利用の小規模（数ha）な馬飼の存在は重要であろう。中世末～戦国期には、島津義弘が 26 年間飯野城城主となり、妻子を 4 km 西の加久藤城に住ませ、段丘を掘り込んだ道⁽¹⁷⁾を馬で往来していた⁽¹⁸⁾。盆地を望む丘陵や段丘突端には、大小 40 以上の山城が占地している。

註

- (1) えびの市教育委員会『東川北地区遺跡群』2005
- (2) 宮崎県教育委員会『野久首遺跡、平原遺跡、妙見遺跡』1994
- (3) えびの市教育委員会『桑田遺跡・二本杉遺跡・元果塚』2019



第2図 小水原地下式横穴墓群の分布および調査区位置図 (1 : 2,500)

- (4) えびの市教育委員会『長江浦地区遺跡群』2002
- (5) えびの市教育委員会『田代地区遺跡群・妙見原遺跡』1997
- (6) えびの市教育委員会『えびの市の城館跡』2008
- (7) (3) と同じ
- (8) えびの市教育委員会『草刈田遺跡』2004
- (9) えびの市教育委員会『株野第1遺跡』2022
- (10) えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群』2001ほか
- (11) 宮崎県教育委員会『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2) 灰塚遺跡』1973
えびの市教育委員会『島内地下式横穴墓群V・灰塚地下式横穴墓群』2017
- (12) えびの市教育委員会『広畑遺跡』1991
- (13) えびの市教育委員会『永田原遺跡・小木原遺跡群葬地区(A・B地区)・ロノ坪遺跡』1990
えびの市教育委員会『永田原遺跡群葬地区(C・D地区)・久見迫地区・原田・上江遺跡群六部市道跡・蔵元遺跡・中滝遺跡・法光寺遺跡I・II』1996
- (14) (13) と同じ
- (15) えびの市教育委員会『小岡丸地区遺跡群』2003
- (16) 中野和浩「えびの市の官道と牧について」『えびの市歴史民俗資料館年報No.5』えびの市教育委員会2013
- (17) えびの市教育委員会『稲荷下遺跡』1997

第3章 小木原地下式横穴墓群

1. はじめに

平成29年度より、市道栗下－上江線拡幅工事が小木原地下式横穴墓群内を対象とすることとなり令和3年度にかけて毎年100m前後の工事が計画された。当初は、毎年2～3基の調査、特に昭和63年度検出・未調査のST-3008・3011・3012+αを本調査する予定にしていたが圃場整備工事で消失してしまったのか、検出できなかった。

結果的には、平成29年度調査区(Ⅰ区)と30年度調査区(Ⅱ区)のみの報告になった。

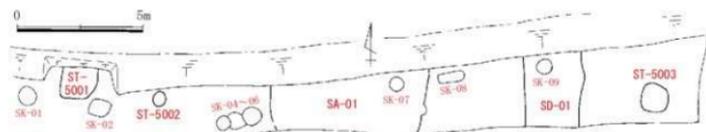
2. 基本的層序

層序は、上からⅠ層：暗灰色土(水田耕作土、市道法面表土)、Ⅱ層：淡黒灰色土(昭和63年圃場整備造成土)、Ⅲ層：黒灰色土(弥生～中世)、Ⅳ層：アカホヤ火山灰(B.P7300)に分別した。弥生～古墳時代の遺構面はⅢb層上面であるが、遺存率が悪い。

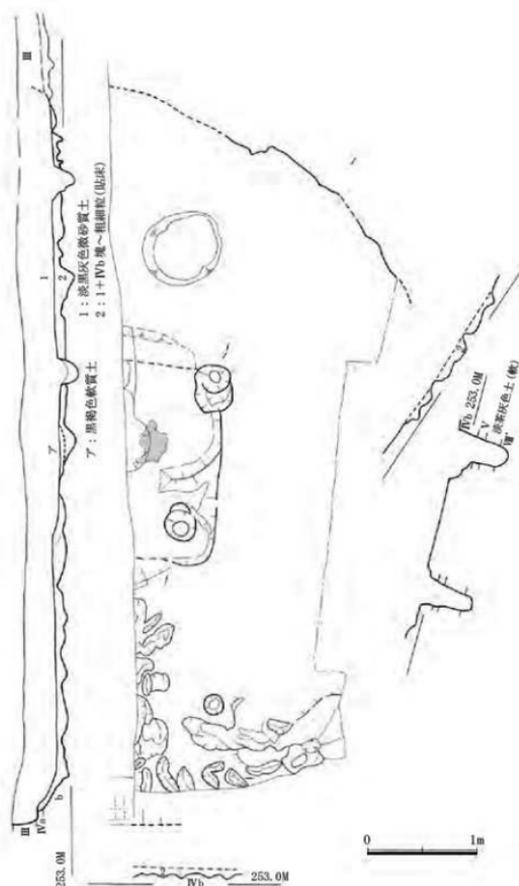
3. 発掘調査(第3図)

Ⅰ区から、堅穴建物1基、地下式横穴墓3基のほか、土坑9基、溝状遺構1、Ⅱ区から地下式横穴墓2基を検出した(第2・3図)。土坑の殆どは攪乱で、弥生～古墳時代のものと断定できるものは1基(SK-10)のみである。

以下、遺構ごとに報告する。



第3図 I区 遺構分布図

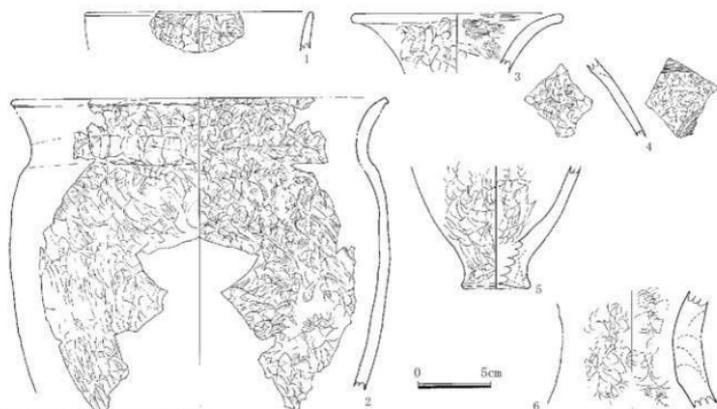


第4図 SA-01 遺構実測図 アミ目は焼土

SA-01 (第4図)

5002号墓と5003号墓の中間に位置した、直径6.8m前後の円形もしくは隅丸方形の堅穴建物である。すでに30cmほど削し、貼床上面で検された。中央部(内区)は1段(2~3cm)下がり、主柱穴2と中央土坑を検出した。中央土坑に南接して、焼土や炭化物が出土した。西側の柱穴は、深さ45cmで、直径15cmの柱痕跡を確認した。東側の柱穴の深さは50cmで、西側に抜き取り穴を確認した。西側外区の貼床を削ぐと、幅20cm、深さ5~6cmのU字型掘削痕

が明瞭である。



第5図 SA-01 出土遺物実測図

表1 SA-01出土 弥生土器 観察表

No.	種類	出庫 (mm)			胎土	焼成	色澤		調整		備考
		口径	底径	高さ			外面	内面	外面	内面	
1	壺小	114	—	—	細砂・基褐色粒少量	良	洗粉	洗粉～洗黄	工具ナゲ	工具ナゲ	口径±1～2cm
2	壺	216	—	(220)	微細砂・基褐色粒微量	良	洗黄～洗灰黄～系灰	洗黄粉～洗灰黄	ハケ	ハケ	スズ多量
3	壺	147	—	—	微細砂・基褐色粒多量	良	洗粉～黄粉	洗粉～黄粉	ハケ	ハケ	
4	壺	—	—	—	微細砂少量	良	洗黄～粉	洗黄～黄粉	半ミヤケ	ハケ	重粘土
5	壺	—	87	(83)	微細砂・基褐色粒少量	良	洗黄粉～洗黄粉	洗粉	ていばい 工具ナゲ	半ミヤケ 工具ナゲ	
6	器打小	—	—	—	微細砂多量 赤褐色粒少量	中々 あまり	粉粉	黄粉～洗粉	龍ハケ	龍ハケ～ 工具ナゲ～ハケ	空やマメツ

内区の覆土と機械掘削排土から、弥生後期の壺甕類が少量出土した。土器片以外の遺物は無い。

SK-10 (第6図)

5003号墓の西側で検出。近現代の溝状遺構(SD-01)に切られた、直径2m内外の円形を呈し、深さ12～16cmの浅い掘り込みで、柱穴等の構造物は無い。厚さ4～5cmの上層(黒灰色土)から、少量の弥生土器細片が出土している。



1a: 淡黒灰色土 SK-10
b: 淡黒褐色土(混IV層粒) ア: 淡黒灰色土(軟質)
イ: IVa+淡黒灰色土

第6図 SD-01・SK-10 遺構実測図

ST-5001 (第7図)

調査区の西端に位置した主軸北の堅坑上部閉塞タイプである。旧表土直下が遺構面であるが、工事業者によって上部が消失している。検出面での堅坑1段目は、東西1.1～1.6 m以上・南北1.2 m以上、深さは2～16 cmを測り、本来は30 cm強を測る。堅坑2段目は、東西52 cm・南北58 cmの略方形を呈し、大小6枚の板石と5個の礫で塞がれていた。埋土は2層に分別されるが、追葬坑は無い。堅坑の深さは1.12 mほどで浅く、下半は下膨れになる。羨門は、幅46 cm・高さ75 cmを測る。底面は若干高く仕切り状に段差が付けられ、厚さ2～3 cmの貼床が施される。

玄室は8～12 cm低くなり、右裾が不整形の平入り両裾の楕円形タイプで、天井は切妻屋根の平天井である。奥行きは1.24 m、幅1.80 m、高さ0.86 mであるが、壁の下半が軟質であり、全周が崩落している。黒色泥土が厚さ20 cmも流入し、遺物の遺存状態が悪い。

被葬者は東頭位の1で、中央寄りに、潰れた頭と貝釧1点を装着した左前腕の他、骨盤・両大腿骨・足の痕跡程度の骨が検出された。熟年の女性で、歯の摩耗が著しく、LSAMATが認められるという所見を得ている。

堅坑埋土から鉄剣片1(7)が出土しているが、帰属するかどうかは不明である。貝釧(8)はイモガイ製で、長さ3.5 cm・幅9 mm程度が遺存する。

ST-5002 (第8図)

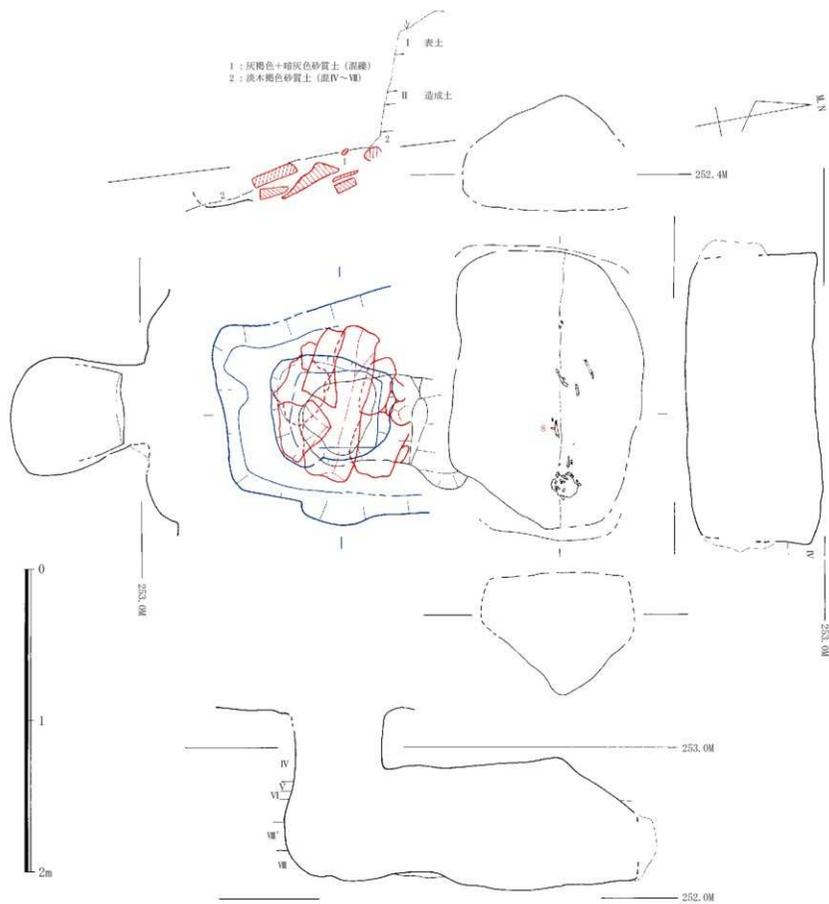
5001号墓の3.3 m東に位置した主軸北の堅坑上部閉塞タイプであるが、上部20～30 cm・堅坑1段目を消失している。閉塞石4枚のうち長さ50 cmの最大のものは堅坑上位に崩落しており、その下に板石が2枚、羨道部に1枚を検出した。堅坑～羨門は黒色土と耕作土で埋められ、玄室は中位まで(厚さ40～50 cm)水平に黒色土が流入し堆積していた。玄室床面北西部では鉄分が厚さ3 mmほど沈積し、鉄器と誤認するほどであった。また、その上5 cm位にも鉄分が厚さ2～3 mm沈積し、擬似床面のようであった。

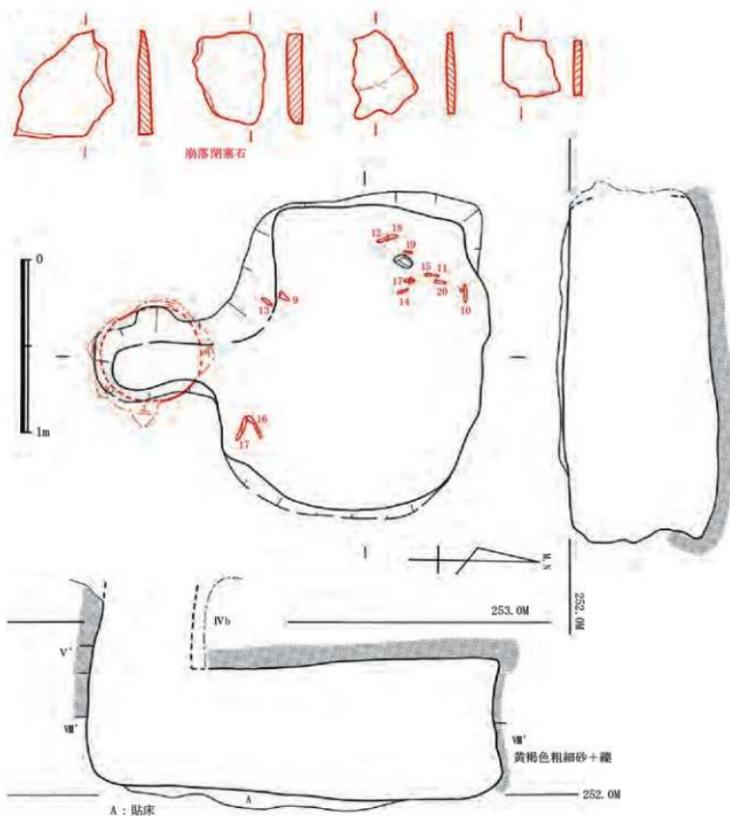
堅坑2段目は直径55～58 cmの円形と推定される。検出面からの深さ1.08 mで、厚さ4～8 cmの貼床がある。羨門は破壊されている。羨道の高さは80～85 cmで、玄室は4～5 cm高くなる。

玄室は、平入り両裾の半円丸方形・略円形の不整形で平天井である。奥行き1.4 m・幅1.9 m・高さ76～86 cmを測り、東側が高い。玄室中ほどまでは貼床が施される。人骨は全く検出されなかったが、両裾部と左奥に鉄鏃が検出された。鉄鏃群の中には、東面にのみ赤色顔料を塗布した拳大の礫があった。鉄鏃の茎部は礫に乗った状態で出土した。鉄鏃は破損して流入土に混じって排出してしまったものが多いが、頭部～茎部遺存例からみると12本とみられ、うち完形は2本である。

玄室の天井から壁上位までと堅坑の上部には赤色顔料が明瞭に塗布されている。

人骨は全く遺存せず、拳大の礫が枕石だとすれば、例外的な西頭位の可能性がある。圭頭鏃(第12図-16)の頭部両面には縦線の刻印がある。



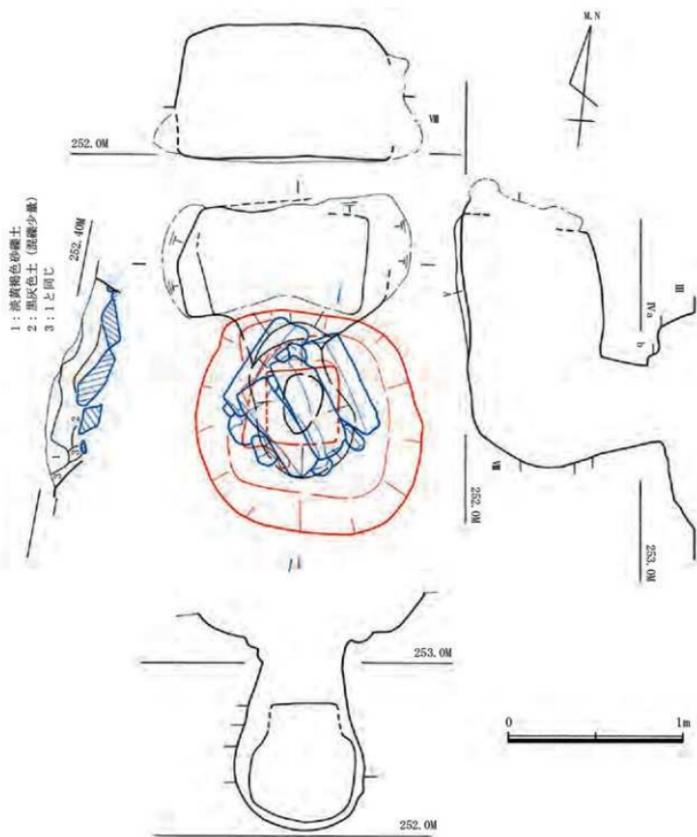


第8図 ST-5002 遺構実測図

ST-5003 (第9図)

調査区の東端で確認した竪坑上部閉塞タイプで、埋土は古墳時代の遺構面よりも若干盛り上がった状態であった。竪坑1段目は、東西1.30m・南北1.27mの略円形を呈し、深さ17～20cmを測る。竪坑2段目は北東寄りに位置し、1辺41～43cmの方形を呈する。幅20cm・長さ60cmの板石4枚で覆い、隙間に河原石が嵌められている。埋土は4枚に分層できるが、追葬坑は無い。羨門の幅は37cm・高さ70cmを測る。

玄室は平入り両裾の切妻タイプの家型を呈するが、壁面の崩落が著しい。奥行きは60cm・幅は1.2



第9図 ST-5003 遺構実測図

mほどで、高さ76～80cmを測る。壁面の下半は崩落し、その土砂が床面全面に厚さ20cmほど覆っていた。玄室には、厚さ2～4cmの貼床が施されている。出土遺物や人骨は痕跡すらなかった。

ST-5004 (第10図)

5003号墓から東へ100m以上離れて検出した。畑の深耕によって堅坑1段目の上半は攪乱され、閉塞石の中央部材は半折し、落ち込んでいた。東端の板石は脆く風化した軟質材である。

検出面での堅坑1段目は、東西1.08m・南北1.29mの隅円方形を呈し、深さ17cmが遺存する。2段目は、中心よりやや北寄りに、南北57cm・東西50cmの方形に穿たれ、深さ1.0m、羨門部に向かって8cm下降する。追葬坑は平断面では確認されない。IV層下はすぐに礫混じり～砂礫層になっており、車輛の振動が主たる原因と思われる崩落(厚さ5～15cm)が顕著で、底面のみ旧状を保つ。羨道は1段(5cmほど)下がり、幅45cm・長さ30～40cmを測る。

玄室は、平入り両裾タイプで、幅1.66m・奥行き0.82～1.04mの長方形を呈し、平天井、寄せ棟の家型と推定される。玄室内は厚さ40cmも黒色土が流入し、人骨も痕跡に近く、東頭位の屈膝葬がわかる程度であり、北東端とその南側に、切先北の圭頭織1本ずつが置かれていた。遺存する人骨の北側には、初葬人骨を想定しても良い空間があり、本来は2体で、各々鉄鍔(矢)1が頭の東側に副葬されたことが想定される。

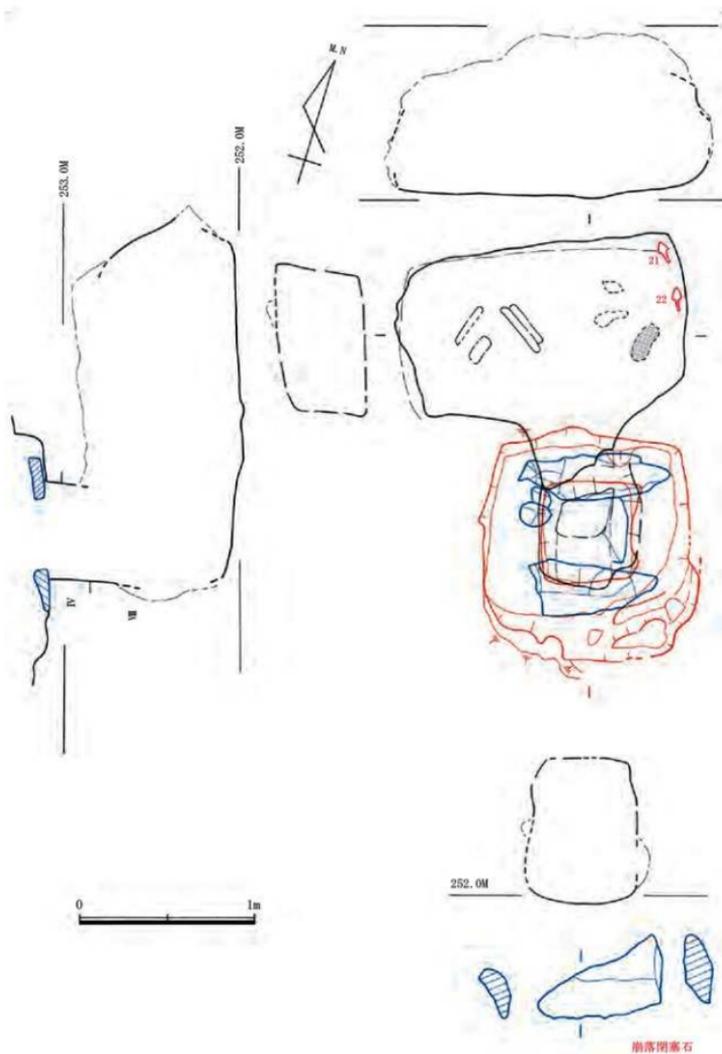
鉄鍔は錆化著しいが、ほぼ同型同大の圭頭織である。

ST-5005 (第11図)

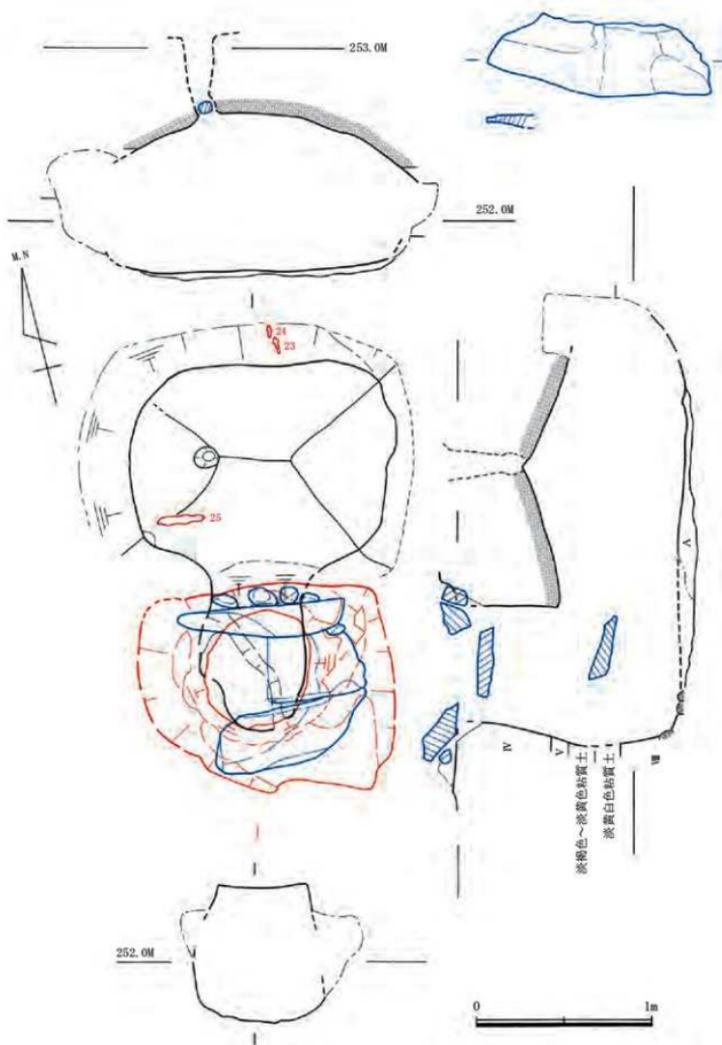
5004号墓の東約14mで検出した。畑の深耕によって、堅坑1段目は痕跡程度が遺存し、2段目の肩は農機の加圧と閉塞石中央材の折損落下によって崩れ、旧状を保っていない。検出面での1段目は、東西1.45m、南北1.18mの隅円長方形に近似する。2段目の最狭部は、長径68cm・短径58cmの楕円形を呈し、深さ1.28mを測る。壁面には刃幅4.2cmの手斧もしくは鉄斧あるいはタビの刃型が残る(表紙、図版16)。V層の下は白色の粘質土(古代の土師器の原材料)で、軟質の砂礫層と共に、壁面のほぼ全周が崩落している。羨門は、幅50～70cm・高さ77cmを測り、貼床(縮まっていない)が8cmある。

玄室は、平入り両裾の楕円形で、天井は寄せ棟の家型が良好に遺存するが、天井まで黒色泥土が付着し削り取ると赤みを帯びており、少量の赤色顔料が塗布されていたようである。幅は1.5m以上・奥行き1.1m以上であるが厚さ40cmの埋積と著しい壁の崩落のために不詳である。高さは92cmで、3～5cmの貼床が施されている。棟の西頂部には、直径12～14cm・深さ3～5cmの穴が穿たれ、拳大の自然礫(第12図-26)で塞いでいる。直上の地上遺構面では直径17cmの楕円形の穴を検出し深さは44cmを測る。埋土にはIV層土が含まれない(黒色土に若干の小礫)。

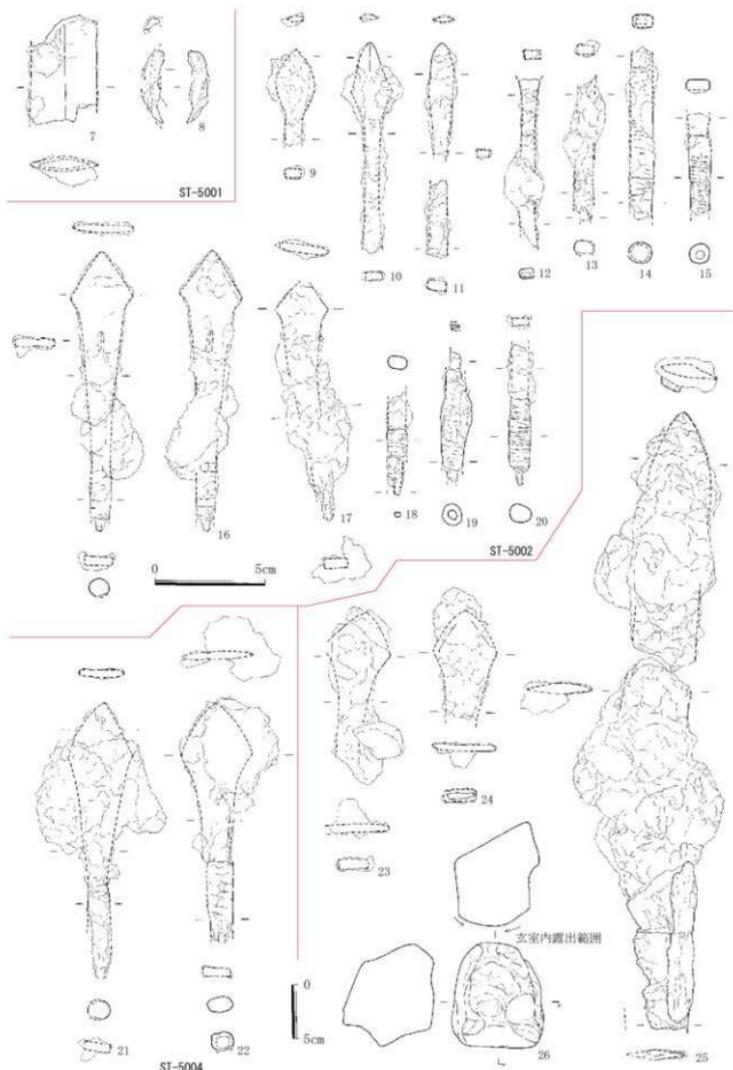
玄室奥壁中央寄りには同型同大の圭頭織2が縦列で、西南部には切先西の鉄剣が検出されたが、著しい錆膨れである。鉄剣は折損剣で、把部が確認されない。



第 10 图 ST-5004 遺構実測図



第 11 圖 ST-5005 遺構実測図



第 12 図 ST-5001 ~ 5005 出土遺物実測図

表2 地下式横穴墓出土 鉄器 観察表

No.	出土遺物	種類	法長 (mm)			備考
			長さ	刃部長	刃厚幅	
7	ST-5003	鉄鏃	(50)	(50)	(30)	型残埋土中、芯は空胴、筋い編
9	ST-5002	鉄鏃	(42)	16	18	断面以下不詳
10	ST-5002	鉄鏃	(97)	23	19	刃部断面は長さ6~9mmに磨かれ、 基部不詳
11	ST-5002	鉄鏃	(53) + (57)	22	10	2月、接点なし、基部不詳
12	ST-5002	鉄鏃	(77)	-	-	刃部・基部不詳
13	ST-5002	鉄鏃	(64)	-	-	刃部・基部不詳
14	ST-5002	鉄鏃	(79)	-	-	基部~口部 55 mm~柄部、 刃部~基部不詳
15	ST-5002	鉄鏃	(64)	-	-	口部 56 mm + α、刃部~基部不詳
16	ST-5002	鉄鏃	128	20	28	断面断面に磨けり、口部 39 mm + α

No.	出土遺物	種類	法長 (mm)			備考
			長さ	刃部長	刃厚幅	
17	ST-5002	鉄鏃	(106)	(16)	24	刃先消失、磨きじれ
18	ST-5002	鉄鏃	(177)	-	-	口部 24 mm + α、刃部~基部不詳
19	ST-5002	鉄鏃	(605)	-	-	口部磨かれ、刃部~基部不詳
20	ST-5002	鉄鏃	(653)	-	-	口部 56 mm + α、下手は筋、 刃部~基部不詳
21	ST-5004	鉄鏃	127	20	28	
22	ST-5004	鉄鏃	116	24	32	基部磨かれズレ
23	ST-5005	鉄鏃	(77)	17	(27)	基部欠損
24	ST-5005	鉄鏃	(51)	20	29	断面~基部不詳
25	ST-5005	鉄鏃	(275)	(275)	30	断面断面磨

まとめ

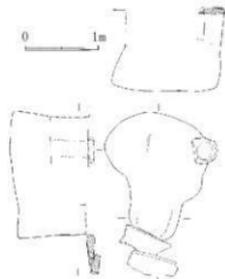
今回の調査においては、小木原地下式横穴墓群小木原支群で3基、蕨支群で2基の5世紀中葉の地下式横穴墓に加え、弥生時代後期の竪穴建物1を検出した。古墳時代前期に墓域となるまでは、小規模な集落が営まれていたことが判明した。

地下式横穴墓5基は全て竪坑上部閉塞タイプで、小木原支群・蕨支群と共通する。現況の水田面から玄室床面までは1.5m前後と浅く、屍床は水分の多い粘土質で、人骨の遺存度が低いことも共通する。玄室の幅が狭い5003~5005号墓の被葬者は屈膝葬と推定され、当墳墓群のみでなく、市内の竪坑上部閉塞タイプの土壌系と家型系折衷型にも多くみられる。小型の土壌形タイプは、板石積石棺墓の屈葬が影響していると思われる。特に島内99号墓や168号地下式横穴墓に顕著に表れている。

5005号墓の天井には、地上と繋がる孔が穿たれ、詰塞磯があった。玄室内から孔の回りを人念に削られており、後代の地上からの掘り込みによる欠落ではない。近辺に掘立柱の集落は無いし、昭和62年調査の蕨B地区の2003号墓にも類似例(第13図)があり、魂の通り路だったのかもしれない。推測の域を出ないが、近現代の孔ではない。

註

- (1) えびの市教育委員会 2001『島内地下式横穴墓群』
- (2) えびの市教育委員会 2017『島内地下式横穴墓群V・
灰塚地下式横穴墓群』



第13図 蕨B地区 ST-2003
遺構実測図

第4章 古代官道跡

1. 調査経緯

従来、日向国府と薩摩国府を繋ぎ、西街道肥後路へも通じた古代の官道は、本市中央を西流する川内川左岸の扇状地～低位段丘、最低位段丘を貫く、市道渠下～上江線および県道京町～小林線(盆地を貫く直線道、通称「山麓線」)がほぼ踏襲し、官道沿いの法光寺跡(布目瓦や埋没礎石の存在)の前身が駅家の可能性があるとして有力視されてきた。しかし、平成以降の市・県道拡幅工事や圃場整備事業に伴う発掘調査の成果によって、山麓線の可能性は薄くなり、延喜式に見える真研駅は、本市中央氾濫原の大字灰塚字真崎地点(第1図)もしくはその周辺が有力となってきた(すでに、1979年に藤岡謙二郎が言及している⁽¹⁾)。詳細は後述するが近年、官道と駅家の位置を絞り込んでいたところ、市道拡幅の計画・遺跡の照会が建設課から打診された。

2. 調査地(第1図)

えびの市役所から西へ500mの水田地帯、えびの市大字灰塚字真崎に位置する市道で、西側40m分は大字灰塚地内、残りは大字永山との字界道である。小字真崎は東西400m、南北50～110mの歪な形であり、南辺はJRと耕地整理によって旧状不明である。地形図では、大字灰塚字弓場本、古川や大字永山地内(耕地整理で小字消滅)のほうが1町四方の区画を想定しやすい。

標高は229.9mで、氾濫原と同じである。

3. 基本的層序

長江川の自然堤防土壌と思われ、粘質微砂が主体である。中世の黒色土(ⅢA層)の下に茶褐色粘質微砂があり、弥生～古墳の土器を少し含む。遺構面は淡茶褐色の粘質微砂である。

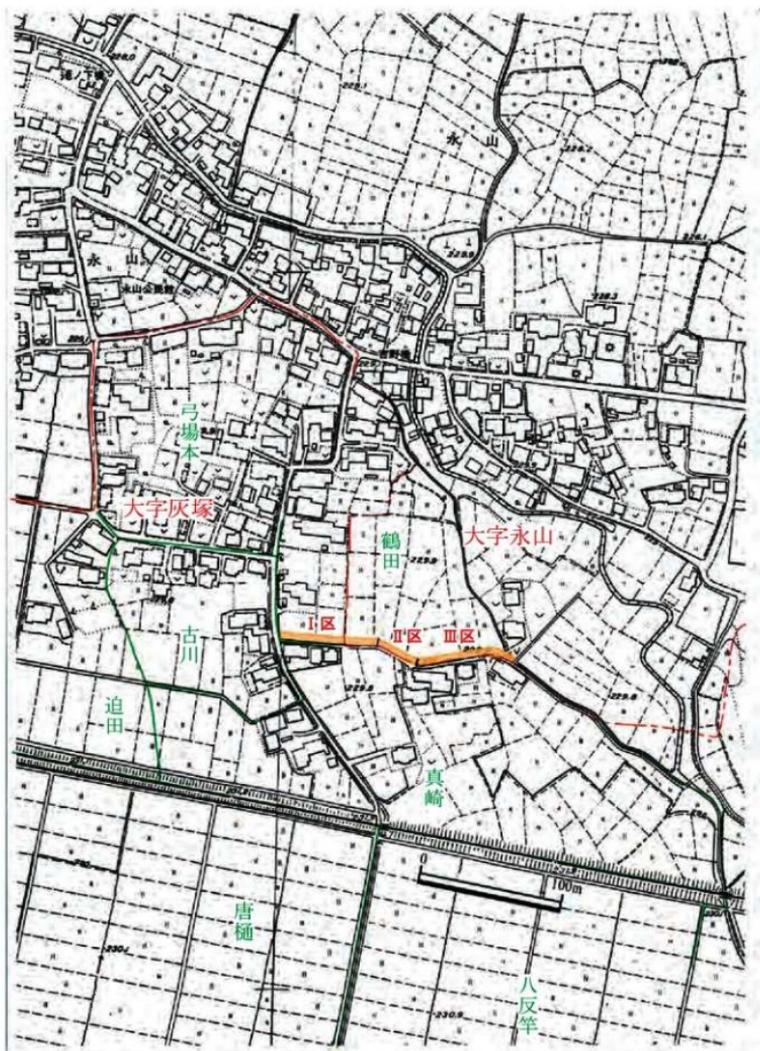
4. 調査方法と予測

市道拡幅部分(厳密には大字永山地内)の表土剥ぎ～遺構検出・調査終了後に、現道部分の試掘・立会調査を実施した。

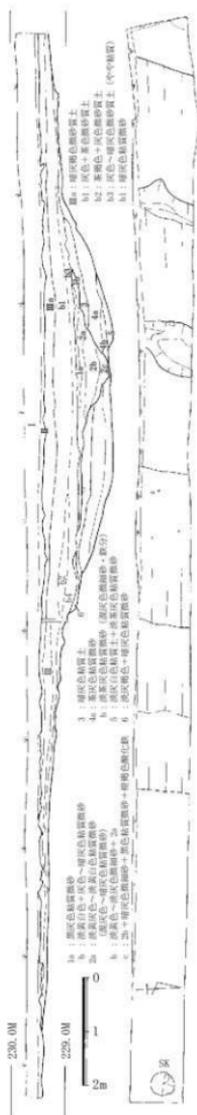
60～108m四方の範囲を囲む柵跡か区画溝等の遺構や、硯、墨書土器、越州窯系青磁、布目瓦、製塩土器等の遺物の出土を期待した。

5. 調査(第2図)

I区において、幅13.6m、深さ約1mを掘下げ、底面の幅2.3m、西側に幅50～92cm・深さ8～10cmの歪な側溝を有する官道跡を検出した。底面は硬化していないので、使用頻度が低く、短期間で埋没したものと思われる。埋没後、幅3m・深さ50cmの溝が再掘削され、底面に鉄分が沈積している。



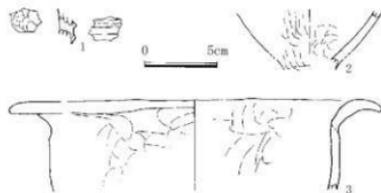
第1図 市道真崎線拡幅工事地点および周辺地形図・字界 (1:2500) ×80%



第2図 官道跡遺構実測図

底面に少量の土器片がみられたが、弥生後期主体の流れ込みと判断される。

東方Ⅱ区～Ⅲ区においては、少量の土器片が出土したのみで、遺構は全く検出できなかった。



第3図 官道跡出土遺物実測図

表1 官道跡出土 弥生土器 観察表

No.	種類	法長 (mm)	胎土	形状	色調		観察	
					外面	内面	外面	内面
1	甕	—	黒砂多量、雲母少量	貝	緑茶陶	緑灰陶	赤くざん	ていねい 土器ナゲ
2	壺	—	黒砂やや多い、 赤褐色粒少量、 雲母少量	貝	黒灰～灰	灰陶～緑灰	黒くざん	ていねい 土器ナゲ
3	甕	口径：25T	黒砂少量	貝	緑灰、赤紅陶	緑灰陶	黒く粗い 土器ナゲ	ていねい 土器ナゲ

6. まとめ

平成14年度に調査した草刈田遺跡Ⅱ区検出の官道跡は、幅20m・深さ80cmに掘削され、道路面は幅1.7～2.7mで北側に幅0.6～1.1m・深さ12～20cmの側溝を有し、主軸は東北東へ傾く。この延長が小字真崎に繋がることは確かであろう。

官道は検出できたが、駅家の存在の確たる証拠は見い出せなかった。今後の開発もしくは学術調査で明らかになっていくであろう。

7. 官道の復元

復元するにあたり、調査履歴をあげて立証する(第4図)。

a. 法光寺跡(イ地点) 隣接東北～南部における圃場整備事業に伴う発掘調査(平成4年度)⁽²⁾

JRの北東側と西へ250m地点

西側A区では市道から北へ40m付近までは道路遺構は無いことが判明している。

b. 草刈田遺跡(B地点) 圃場整備事業に伴う発掘調査(平成14年度)⁽³⁾

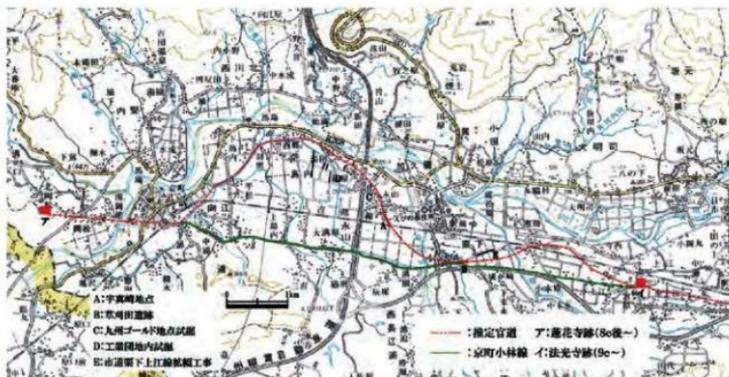
県内で唯一、幅12mほど・長さ約40mの官道跡が現況で確認できる地形が残っており(現在は消滅)その東側Ⅰ区とⅡ区で埋没官道を検出した。

c. 市道栗下上江線拡幅に伴う試掘調査(E地点、平成28・29年度)

現道と官道が一部でも重複するか、痕跡があるかを探るために試掘と工事立会を実施したが、表土下50～60cmで砂礫層になり、池島川の氾濫堆積層(年代不詳)によって検出困難となっている。

d. 県道京町一小林線拡幅工事に伴う試掘調査(大溝原一上島内間、平成19年度、県文化課)

拡幅工事部分の試掘。特に県道と並行する狭長な畑に実施されたが、道路遺構は無かった。



第4図 官道復元図

e. 九州ゴールド株式会社敷地内試掘調査（C地点、平成29年度）

周知の遺跡外であったが、官道の存在が予想されたので、駐車場整備前に重機で長さ30・50・60mの試掘溝を入れたが、全面粘質土と砂礫の氾濫堆積で、道路遺構は発見できなかった。

f. 工業団地（D地点、令和元年度）

平成31年2月に11.38haの実施が決定したのを受けて、重機で延べ900mほどを試掘した。全ての地点において、GL-1mほどで湧水、砂礫層となり、道路遺構のルートが3～4本推定されたが痕跡は皆無であった。

以上のことから、C～D地点の範囲では無く、より北側～国道付近を想定する必要がある。中近世の氾濫砂礫で消滅した可能性も高いが、古代官道は、長江川～川内川の安定した自然堤防に乗っていたと考えるのが自然である。

小林市大字細野字夷守から法光寺跡までは約15kmで、駅家間の距離としては有望であるが、9世紀には礎石の瓦葺き建物が建立された寺院と推定され、さらに4.5km西方の大字灰塚字真崎地点は夷守から約20kmあり、何らかの理由で法光寺地点から移転した可能性もある。真研駅は大字灰塚字真崎にあったことはほぼ確実とみられ、市内では、古代の小規模な牧が数ヶ所⁽⁴⁾にみられ、断面逆台型の区画溝と段丘崖を利用した数haの放牧地と数棟の掘柱建物跡、多量の製塩土器、馬具・馬歯などの出土は馬の生産・安定確保を想定させる。また、製塩土器の出土は官道建設・馬の搬入と密接な関わりを持つと考えられる。

註

- (1) 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅳ』第九節「日向国」1979
- (2) えびの市教育委員会『小本原遺跡群蔵地区（C・D地区）・久見迫地区・原田・上江遺跡群六部市遺跡・蔵元遺跡・中溝遺跡・法光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ』1996
- (3) えびの市教育委員会『草刈田遺跡』2004
- (4) 中野和浩『えびの市の官道と牧について』『えびの市歴史民俗資料館年報 No 5』えびの市教育委員会 2013

『日向国の官道』については、『宮崎県史 通史編古代2』（1990）において永山修一氏が絶括的にまとめられているので研究史は触れなかったが、現時点においても新たな資料は加わらない。ただ、本市の西部部においては、河川の自然堤防上に構築された可能性が高いことがわかってきたことは事実である。なお、本市では、30年以上前から小字の使用が行政的都合により廃止されており、若い世代は知る由もない。小字名の持つ意味は歴史的にも重要なのであるが、復活することは無いであろう。

第5章 えびの市小木原 5001 号地下式横穴墓出土人骨

鹿児島女子短期大学 竹中 正巳

はじめに

2018年2月に、えびの市小木原地下式横穴墓群の発掘調査が行われ、堅坑上部閉塞タイプの5001号墓から古墳時代人骨1体が出土した。出土人骨について人類学的に精査した結果を報告する。

人骨の所見

5001号墓の玄室中には、1体のみが遺存していた。発掘調査時の情報から、他に埋葬された人骨はなかったと考えられる。人骨の保存状態は悪い。遺存部位は、頭蓋（主に前頭部から鼻部）、歯、左機骨、左尺骨、左右大腿骨および左右不明の足の骨だけで、それぞれの骨や歯の一部が残る（図1）。

単体埋葬であり、出土状況から東頭位の仰臥位の埋葬であった。左肘関節はまっすぐ伸ばしていた。右肘や左右膝関節の屈曲や伸展状況は不明である。遺存する副葬品は貝輪1点で、左前腕に着装された状態で検出された。人骨に赤色顔料の付着は認められない。

年齢は歯の咬耗がMartinの2度であることから熟年で、性別は眉弓の突出がないことから女性と判定された。頭蓋で計測できたのは、鼻骨だけであった。鼻骨最小幅は8mm、鼻根横弧長は9mmであり、鼻骨湾曲示数は88.9を示す。顔面平坦度は鼻骨の弦が8.4mm、垂線が0.6mm、鼻骨平坦示数が7.7と平坦である。鼻骨の突出は認められない。

遺存する歯は、上顎左中切歯、上顎右側切歯、上顎左右犬歯、上顎左右第1小臼歯、上顎左右第2小臼歯、上顎左第1大臼歯である。上顎左犬歯、上顎左第1小臼歯、上顎左第2小臼歯は上顎骨歯槽に植立するが、他は遊離歯の状態では遺存する。

上顎左中切歯の舌側面にはLSAMAT（上顎前歯舌側面摩耗）が認められた。歯を使い、動植物等を引きしごく作業を行っていたのかもしれない。上顎左右犬歯の近心面歯頸部にC3のう蝕が認められた。上顎左第1大臼歯の頬側遠心根と口蓋根にセメント腫が認められる（図2）。両根の遠心面の歯根中央部から根尖にセメント質の増殖が認められる。

おわりに

小木原地下式横穴墓群は数群に分かれ、400基以上の地下式横穴墓が確認されている。加久藤盆地には、人骨の残りのよい島内や芋畑地下式横穴墓群もあるが、小木原は人骨の残りが悪い。加久藤盆地の古墳時代史を精緻に解明するためには、小木原地下式横穴墓群からの保存のよい人骨の出土は欠かせない。保存良好な人骨の出土が待ち望まれる。



図1 小木原 5001 号地下式横穴墓出土土人骨



図2 上顎左第1大臼歯の頰側遠心根と口蓋根に認められたセメント腫
(左：遠心面から撮影 右：根尖側から撮影)

第6章 小木原 5001～5005 号地下式横穴墓の三次元計測

えびの市域の地下式横穴墓群における三次元計測 えびの市では 2014 年度の島内 139 号地下式横穴墓の発掘調査で大量の副葬品が出土し、その記録方法が課題となった。そこで、当時まだ試行段階であった Agisoft 社 Metashape (旧 Photoscan) を利用した SfM/MVS による三次元計測を奈良文化財研究所・金田明大氏のご協力のもとに実施し、調査を円滑に進めることができた。

この成果をもとに 2015 年度以後、島内地下式横穴墓では、鹿児島大学総合研究博物館・橋本達也が通常の写真撮影に加えて、フォトグラメトリ (SfM/MVS) による三次元データ作成を考慮した写真撮影を行っている。その成果は、えびの市教育委員会 2020『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第 58 集 島内地下式横穴墓Ⅵ 灰塚地下式横穴墓Ⅱ』でも報告している。

ここでは、えびの市所在の島内地下式横穴墓群と並ぶ大規模地下式横穴墓群、小木原地下式横穴墓群での三次元計測の成果を報告する。撮影は以下の年月に実施した。

2018 年 2 月、5001 号～5003 号地下式横穴墓。2018 年 9 月、5004・5005 号地下式横穴墓。

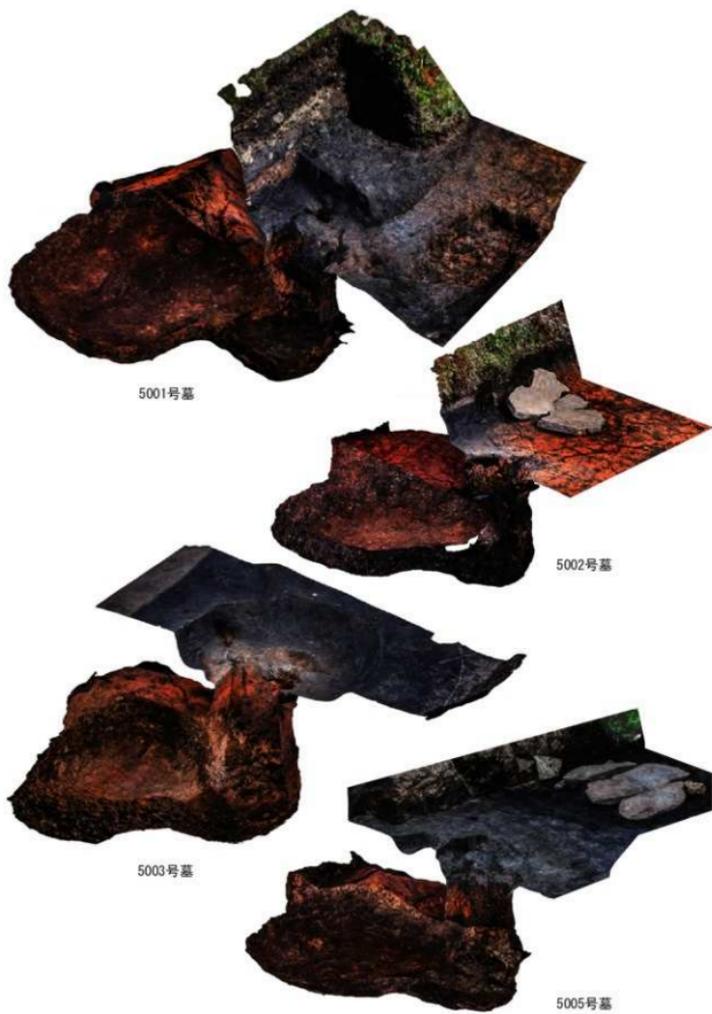
今回、小木原地下式横穴墓群で調査の対象となったものは、いずれも堅坑上部閉塞の地下式横穴墓であった。このタイプは堅坑が狭く、また小型のものが多い。島内地下式横穴墓群とは異なり、副葬品がほとんどなく、人骨の遺存状態も不良であるため足の踏み場に困る状態にまではならなかったが、それでも狭さから撮影位置・姿勢が限定され、多角度からの撮影は難しいものであった。

上部閉塞タイプの地下式横穴墓の全体を一つの三次元データに仕上げるためには、堅坑部分と玄室部分のデータを別々に作成した上で結合する必要がある。とくに玄室内羨門側の撮影は難しく、5004 号墓ではこの部分の写真が不足し、一連のデータに仕上げるができなかった。堅坑部分と玄室部分の位置関係が確実に復元できなかったため今回ここでは掲載を見送ることとした。本来は、現地で仮にアラインを確認しておくべきではあるが、撮影に注力し、当日そこまでの余裕がなかったことに問題がある。橋本が 2018 年当時使用していたノートパソコンではスペック的にも現地作業はまだ課題があった。今後ともさらなる手法に改善が必要である。

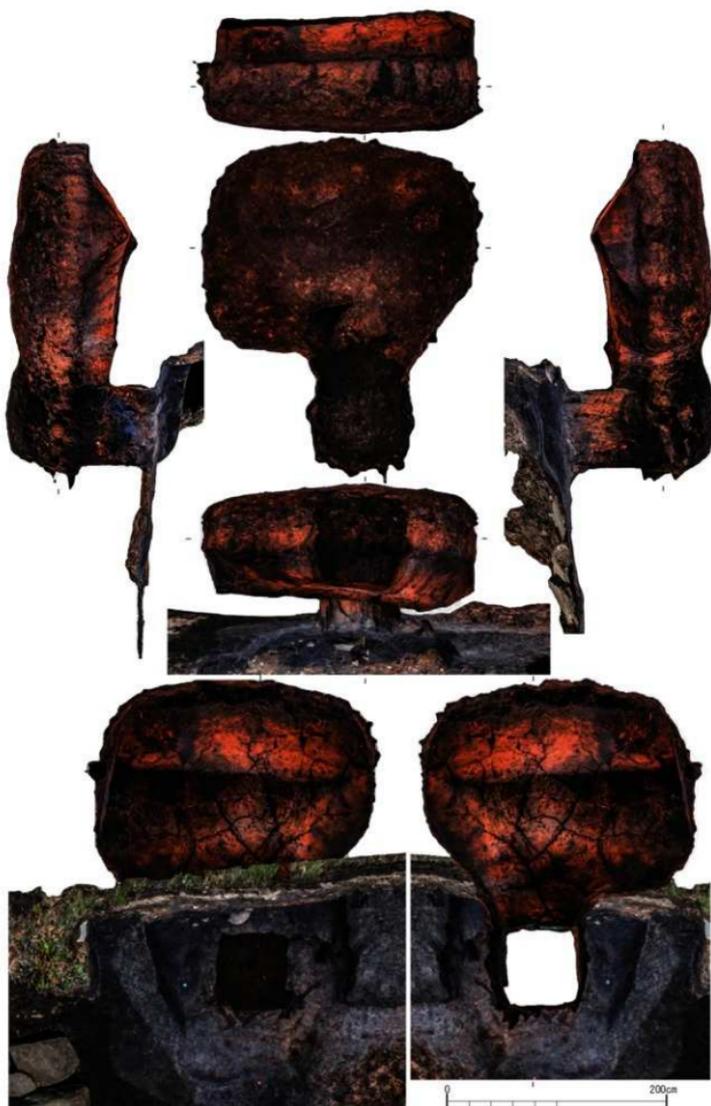
地下式横穴墓における三次元計測の有効性 発掘調査において資料の観察に基づく記録法として実測は必須であるが、実測図は作者の認識に固定され、かつ線画はきわめて多くの情報を捨象しており、複雑な構造をもつ地下式横穴墓では分析・検証の有効範囲が相当に限定される。また通常、地下式横穴墓の保存方法は埋め戻すしかなく実物の公開が困難という特性もある。これらの問題点に対応する上で三次元データの利用は非常に有効であると考えられる。

これまで、島内地下式横穴墓群において報告済み分のデータは、WEB 上の三次元データ共有サービス、Sketchfab で公開を行っている。今回、報告のデータも以下の URL で順次公開を予定している。

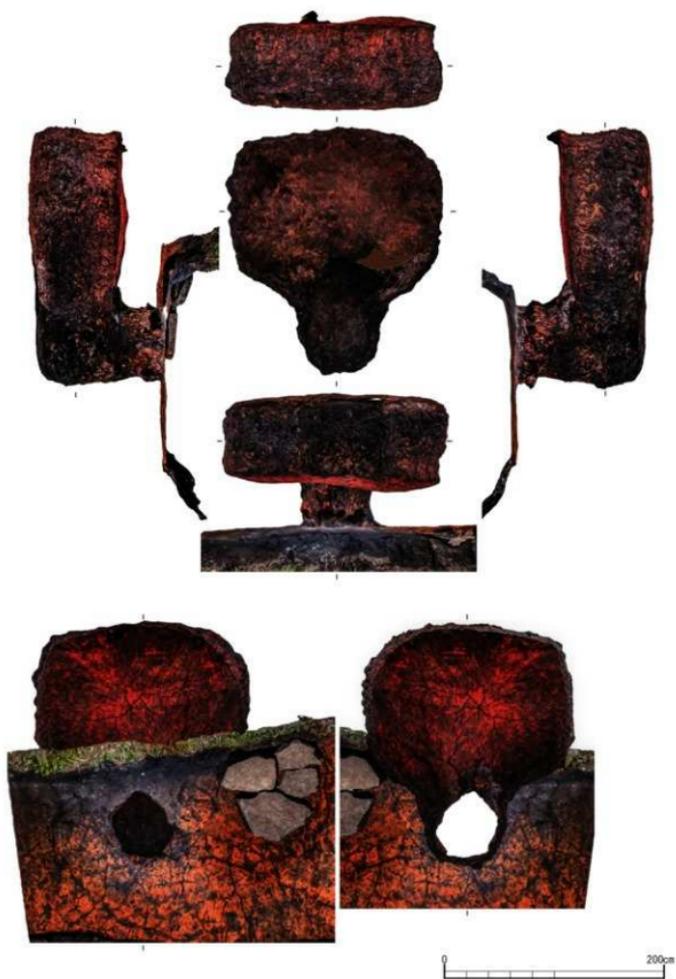
Sketchfab アカウント名：宮崎県えびの市の文化財 <https://sketchfab.com/ebino>



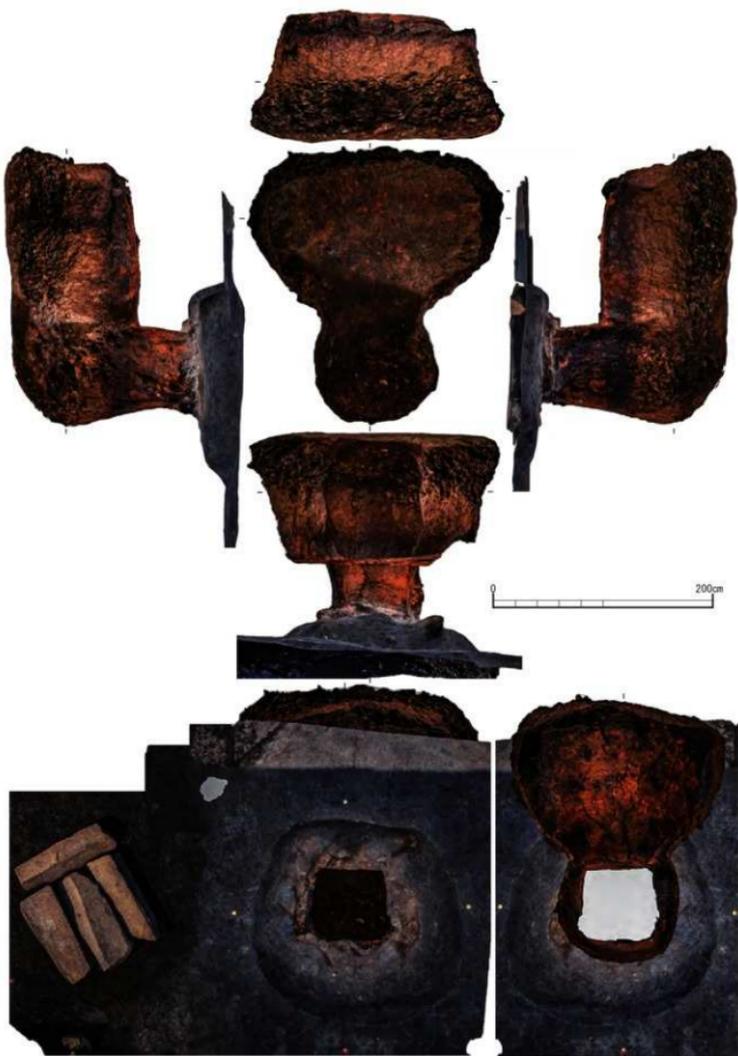
第1圖 5001・5002・5003・5005号墓三次元斜俯瞰画像



第2圖 5001号墓三次元展開圖



第3图 5002号墓三次元展開図



第4圖 5003号墓三次元展開図



第5圖 5005号墓三次元展開図

小木原地下式横穴墓群Ⅱ

写 真 图 版



1区 全景（西から）



同上（東から）



SA-01 貼床面除去 (南西から)



同 内区 焼土・土器片 出土状態 (南から)



主柱穴出土状態



同 内区~西側 貼床除去



同 全景 (南東から)



ST-5001 竪坑検出状態 (南から)



同 埋土除去 竪坑上部閉塞状態 (南から)



同右上 (北から)



同 発掘全景 (南から)

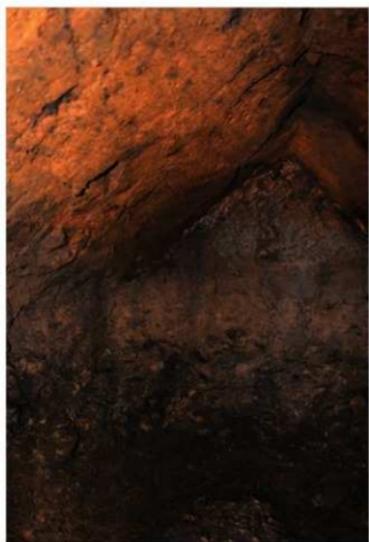
図版 4



ST-5001 玄室内



同 西壁



同 東壁 下端中央に頭骨



ST-5001 人骨左上腕具剣之頭骨



同左 左上腕之具剣



同上 頭骨



同 大腿骨~寛骨

図版 6



ST-5002 検出, 竪坑内崩落閉塞石検出



同 竪坑出土 閉塞石



同上 板石崩落状態



同 竪坑 完掘 壁に赤色顔料(南から)



同右上 東壁の赤色顔料(西から)



同 西壁の赤色顔料(東から)



ST-5002 玄室



同 西側の鉄鍬群と拳大の礫

図版 8



ST-5002 玄室中位の天井の赤色顔料塗布状態



同 西壁上の天井の赤色顔料



同 東壁上の天井の赤色顔料塗布状態



同 豎坑東面の赤色顔料塗布状態



同 半截, 断面 (東から) 追葬坑なし



同 完掘 (東から)



ST-5003 竖坑検出状態 (南から)



同 竖坑上部閉塞状態 (北から)



同 中位～東



同 西壁～北壁天井の掘削痕



ST-5003 玄室 西～中位



同 東壁～天井の掘削痕



ST-5004 検出状態 (南から)



同左



同 竪坑半截 (西から)



同 竪坑上部閉塞状態



同 完掘



同 閉塞材

図版 12



ST-5004 玄室 左下に下肢骨、右奥に鉄鏝2を縦に配置



同 南側の鉄鏝（左上）手前の赤色顔料と頭骨痕



ST-5005 竪坑検出状態 (南から)



同左 (西から)



同 閉塞板石除去、券文の誂石(南から)



同 竪坑内 崩落板石 下に白色粘土層



竪坑上部閉塞板石



玄室棟西端上の小pit

図版 14



ST-5005 玄室内



同 西側～中央付近



同左 接写 (黒泥土を除去しぎれていない)



同 左裾部 上位の壁面



ST-5005 寄棟西角～西面 角に穿孔・詰塞石



同右上 (真下から)

図版 16



ST-5005 玄室 北東角～天井



同 北西角～天井



同 棟 東端部



同 竪坑内 上部の手斧もしくはタビによる掘削痕



SA-01 出土遺物



ST-5001 出土遺物 (1) 同左 (2)

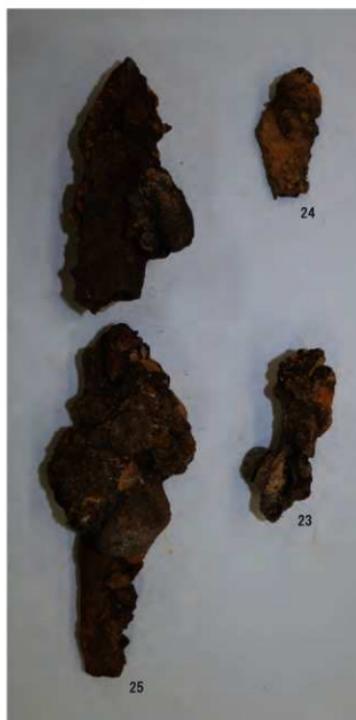


ST-5002 出土遺物

図版 18



ST-5004 出土遺物



ST-5005 出土遺物

古代官道跡

写真図版



市道真崎線拡幅西端部（I区）（西から）



I区東端から西を望む



II～III区（西から）



I区 管道跡 清掃（西から）

図版 2



I区 官道跡 全景 (北西から)



I区 現道下 確認調査



I区 東部現道下 確認調査



II区 現道下 確認調査



III区 現道下 確認調査 近現代の柵列

図版 4



官道底面出土土器
左端 2 段目のみ古代か



I 区東半部
Ⅲ層出土土器



Ⅲ区
Ⅲ層出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	こきばるちかしきよこあなぼぐん こだいかんどうあと					
書名	小木原地下式横穴墓群Ⅱ，古代官道跡					
副書名						
巻次						
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第62集					
編著者名	橋本達也，竹中正巳，中野和浩					
編集機関	えびの市教育委員会					
所在地	宮崎県えびの市大字大明司 2146-2					
発行年月日	2023年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市 町村	遺跡 番号			
こきばるちかしきよこあなぼぐん 小木原地下式 横穴墓群	えびの市大字上江 字小木原	45209	3002	2018.2.7～ 2.27, 8.28～ 9.19, 10.10	340 m ²	市道拡 幅工事
こだいかんどうあと 古代官道跡	えびの市大字灰塚 字真崎		—	2017.11.6 ～7.12.26, 2018.2.2	300 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
小木原地下式横穴墓群	集落古墳	弥生古墳	竪穴建物 地下式横穴墓	土器、 鉄剣、鉄鏃、貝類	墓域内初の 竪穴建物を検出	
古代官道跡	道路跡	平安	官道跡	弥生土器	底面幅2.3m、硬化面無し。殆ど使用されずに埋没か。	

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第62集

小木原地下式横穴墓群Ⅱ・古代官道跡

市道拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5年3月

編集・発行 えびの市教育委員会
えびの市大字大明司 2146-2
印刷 株式会社 大口新生社印刷
鹿児島県伊佐市大口大田 2319-1

